

最初の印象



川本正良先生

松山市

川本 正良

愛媛大学名誉教授
元「いたどり」主宰
俳号 臥風

大正十三、四年頃、松山へ御巡錫遊ばされると笹本上人は高等学校（今の愛媛大学の前身）へ来てお話しさるのが常であった。自分が初めて御上人を見奉ったのはその時である。普通の教室に、まばらに一杯になる位の数の教官と生徒がお話を聞いた。約一時間位「真我」のお話があったと思ふが、記憶に残ってゐない。と言うのは自分の注意はお話を聞く事よりむしろお上人の御相好を拝する方に集中されてゐたからである。後にはあんなに親しいものとなつた、微笑をお含みになつた円満な御顔が、どんなに強い印象を自分に与へた事だろう。その時不図自分は「此方はほんものだ。（甚だ失礼な言葉であるが、其時思つた通りを記す。人天の師、といふ様な言葉は当時まだ知らなかつた）いよいよ困つた時には此方の所へ飛んで行けばいい」と思つた。此の啓示が自分の頭に閃めいた瞬間を自分は祝福する。

昭和四年の夏、遂に自分は神奈川のお寺に飛んで行つた。「いよいよ困つた時」が別に來たのではなかつた。

然し、「本當に偉大なものがあるならば、それを握るに躊躇してはならない」といふ様な考へが自分を支配した。初めてお目にかかつて以来、お上人の存在が常に自分の内のどこかで働きつづけてゐたものと思はれる。唐沢山のお別時へ御出発の三日位前であつたと思ふ。本堂と玄關の間のお座敷に机を置いて、横浜在住の〇君と自分との為に、それから三日間「真我」のお話をして下さつた。手擦れのしたノートをお開きになつて、色々の言葉をお引きになつた。丁度お盆の頃で、緋の衣のお上人は時々本堂へお立ちになつた。そして檀徒が帰ると直ぐ又お話がつづいた。

それからお上人に随行して唐沢山へ行つた。唐沢山では天国に居る様な気持で感激の一週間を送つた。そして此の前後十日間に、自分は実に百八十度の転廻をした。それ迄にも自分は神と言ふものを考へて居ないではなかつた。然しそれは常識の範圍を出でなかつた。高々法身の漠然とした予感位のものであつた。明治以来の、唯物論を根柢とした科学的教育を受けて育つた者の一人として、自分も固い固い唯物論の殻に包まれてゐた。其の一角が突き破られると崩壊して、その向ふに、微妙甚深の心靈の世界が覗きこまれた。余りの光に打たれて自分は眩惑してしまつた。

釈尊出世以来、仏教の大きな殿堂が屹然として聳えてゐた。それはなつかしい香を吹き送つて来る世界ではあつたが、然し神秘なる教義の世界でもあつた。近代西洋の哲学的、科学的思考、明治以来のその直訳的思考を以てしては決して触れる事の出来ない世界であつた。両者の間には決して踰える事の出来ない溝がある様に思はれた。ところが其の溝に橋がかかつた。それまでの論理的、科学的思考を駆使して、神秘的三昧の世界の固い扉が開かれた。神秘極まる世界が充分に解信された。何といふ美事な橋渡してあつた事だらう。それにはお上人御自身懷疑から御出発になつた事が好都合であつた。御上人は伝統的教義をはなれた所から

御出発になり、心理学を主とする科学的方法を以て自内思考をお進めになった。そして神秘極まる心靈界の奥殿へと我々を連れて行って下さった。教義の紫雲に包まれておいでになった如来様が、自内思考の前に厳然として実在しました。

何といふ偉大な事だらう。哲学、科学がここに於いて終極に達したのではなかったか。(ああ世界が此事に気がつくまでに、これからどれだけの時間がかかる事だろう。)そして仏教が、哲学、科学にこれ程自分を示した事も今までに曾てなかった。弁栄聖者の円具教には、教義的、哲学的、科学的、芸術的のあらゆる体系が包含されてゐる。哲学、科学は其の終極の目的として、報身の密嚴浄土に肉迫しなければならない。そして其の可能なる事をお示し下さったものが実に笹本上人の御説法であった。これが哲学、科学の終極目的であると共に、これからの仏教の活動も此の方向に力が注がねばならない。無限の感激を抱いて自分は唐沢山を下った。